

# Alert 反天皇制運動 38号

[通巻 420 号]  
2019年  
8月6日発行

第X期・反天皇制運動連絡会

## 今月のAlert

● 排外主義やヘイトが席捲する状況に抗して今こそ私たちの闘いを——\*2

反天ジャーナル●——きょうごくのりこ、中村ななこ、俺たちに明日はない——\*3

状況批評●皇位継承問題と「女性・女系天皇」論議の現在——桜井大子\*4

ネットワーク●茨城国体反対デモへの招待——加藤匡通\*7

太田昌国のみたび夢は夜ひらく(110)

●「政治」と「選挙」をめぐる——太田昌国\*7

マスコミじかけの天皇制(37)●「ナルヒト・マサコ」賛美と「アキシノ・キコ」ブーイングの手のひら返し——〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その3——天野恵一\*8

野次馬日誌\*9 集会の真相\*10 学習会報告\*11 反天日誌\*12 集会情報\*12

この春、鈴木裕子著『天皇家の女たち』（社会評論社）という本が出た。古代から現在まで、皇室の女性のあり方・活動・役割を追っている。著者の専門からして近代以降が詳しく、いろいろ知識を与えてくれる。身近に備えておくで大変役に立ちそうだ。

皇后をはじめ皇室の女たちはずいぶん忙しく多彩で広い活動をしていたものと驚く。この人たちが抜きでは近代天皇制は多分姿が変わっていただろうと思われる。ことに近代天皇制の大きな働きである国民の心の一体を作り出す面においてそうだ。「御真影」に夫婦対で写っているのも当然なのだ。

そこでちょっと頭に浮かんだこと。この人びとの働きは、近代日本家族における女の働きを象徴しているようだ。後者についてかつて柳田国男は、日本の家族において女の地位は高く重く、そこには家族を支える上での権限と責任があったのだと言った。このとき彼はこの働きが「家」の存続・継承のためのものだということは軽くやりすごしていたような気がする。皇室における女の働きは日本社会における女の役割を重からしめるのに大いに役立ったというべきだろう。もちろん現在社会の存続と継承のための役割だ。

ところでいま問題の女性・女系天皇ということになるとこの役割はどうなるのだろうか。皇后は天皇より一歩さがって役割を果たしている。この構造は女性天皇ではどうなる？

女性天皇拒否論者は社会における「婦徳」の崩壊をも予感・危惧しているだろうが、賛成論者は女性天皇にどんな日本社会を象徴させようと考えているのか。女性の地位が高まるだろうなどとあまく見ていると、しぶとい天皇制のことだから、天皇制存続だけ食い逃げされて、性別役割分担社会はそのまま、ということになる可能性もありそうだ。

(信天翁)



250 円

- 定期購読をお願いします（送料共年間4000円）
- 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス  
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス  
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/> mail: [hanten@ten-no.net](mailto:hanten@ten-no.net)
- 以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

今月の  
**Alert**

## 排外主義やヘイトが席捲する状況に抗して今こそ私たちの闘いを



資本主義の「共通価値」として語られていたはずの「公正」や「平等」が、さらに「自由」までもが大幅に毀損されていつている。トランプの「アメリカ第一」は、「自民族優先」さらに世界的な排外主義、他民族排斥やヘイトの潮流として、はっきり時代を画している。こうした状況下で危ぶまれながらも、前回の自民党大勝が多少は是正され、参議院においては改憲与党が2/3を超える構成ではなくなった。しかしもちろんその内実において危険水域は続いており、あらゆる条文や理由を持ち出して改憲に踏み出そうという政治勢力はあまり減少していない。

むしろ、日本国家や社会システムの全体的な衰退の原因を、極右のいう「特定東アジア」や、国内の「反日勢力」の「存在」に仮構して、権威主義的体制を造り上げようとする動向はいよいよ悪性のもものになっている。中国との関係、北朝鮮との関係においては、アメリカへの依存を強いられ、ロシアに対しては「領土交渉」で成果を上げると広言しておきながら、「安倍外交」はほぼその全てを喪失する真逆の「大成果」を上げた。だからこそ、安倍らの日本政府にとっては、韓国への強硬的なふるまいだけが、この愚かな政府への「求心力」を生みだす呪法となっている。

韓国を輸出「優遇」の「ホワイト国」から外すという措置は、日本国内メディアやネット世論を除く世界中の誰の目から見ても、戦

時性奴隷とされた「慰安婦」問題や強制による「徴用工」問題についての報復措置である。これはトランプ流の国内経済第一主義ですらなく、「反韓国」世論を煽ることで、排外主義をテコとして国内の諸問題があるいは打ち消しあるいは歪める政治操作に他ならない。



八月一日から、愛知県で「あいちトリエンナーレ2019」が開催されている。今回は津田大介を芸術監督として、その選考においても男女平等にするなどの注目される試みがあり、多くの作品を集めている。その中のひとつのプログラムとして、「表現の不自由展・その後」という展示がなされている。(https://censorship.social)

このプログラムは、二〇一五年に練馬で開催され、私たちも協力した「表現の不自由展」の発展形とも言つべきもので、ニコンサロンでの写真展を圧殺された安世鴻さんの写真、富山県立近代美術館で作品や図録を破壊された大浦信行さんの絵画、そしてキム・ソギョン／キム・ウンソンさんによる「平和の少女像」など、一六組の作家による表現が一堂に会している。そして、とりわけ日本の戦争・戦後史を問題とする作品に対し、歴史修正主義者やヘイト活動家、「ネットウヨ」からの激しい攻撃が、たったいまも続いている。なかでも「少女像」に対しては、SNSなどで煽動された破壊の危険も含め、河村市長や菅官房長官な

ど極右の政治家たちによる弾圧が準備され、展示は予断を許さない事態にある。「表現の不自由」とは、日本の戦争責任、歴史問題、天皇制の問題であり、国家や右翼により遂行される脅迫と暴力、まさに国家「テロ」から自由をかちとる闘いの問題なのだ。

(注：八月三日夕刻「表現の不自由展」の撤退が報道された。)



これら展示の防衛や対策にあたる現地からの報告をじりじりした思いで聞きながら、私たちは、今年は「おわてんね」として、八月一日の「国家による『慰霊・追悼』反対」行動の準備を進めている。またその直前には「平和の灯をーヤスクニの闇へ」キャンダル行動」も行なわれる。昨年の靖国宮司による「天皇批判」に続き、「カネ」や「女性差別」の問題も露呈するなど、靖国神社など宗教右翼の破壊的な内実も明らかとなり、天皇制や天皇主義者たちはますます揺らいでいる。だからこそ右翼たちの攻撃もいや増すと想定されるし、徳仁による「全国戦没者追悼式」での初めての発言には大きな注目が集まっている。それは、秋の即位式や大嘗祭、来年に予定されるオリ・パラなどを通じ、「代替わり」直後の天皇制を支えるための重要なイベントとしての役割を持つ。合言葉は、「天皇に平和を語る資格なし」である。多くの人がひとつもにこの闘いをかちとっていききたい。(蝙蝠)

## 反五輪国際 week、サイナー！

七月二十四日は二〇二〇東京オリ・パラの一年前。と言っわけで、七月二〇日から二七日までの八日間、反五輪国際イベントをやった。国際？とぶち上げたものとなる？と思うのも杞憂、韓国やロス、リオ、パリ……、オリンピックを開催した、する国を始め、各国から来た三〇人をごえる仲間たちと熱のある行動や議論の場を共にした。反五輪の会、研究者のグループ、おことわりリンクと共に平昌オリンピック反対連帯やNo olympics LAも主催者に加わったシンポジウム、持参したバナーを先頭にしたデモやデモのコール、街宣での段ボールの手作りの被り物やプラカ、大阪から来た仲間たちのビーガン食の応援などなど、私たちの力量をはるかに超える取り組みが成功した。

二二日には一九人の仲間と福島へ。大熊町議の木幡ますみさんの話に真剣に耳を傾ける。聖火リレーのスタートはピッカピカのJビレッジだが、国道6号線から見る帰宅困難区域とのあまりの違いに絶句だ。二七日、上智大学のシンポではいっしょに行ったしAのLeoが福島島の報告。胸がいっぱいになった。No olympics anywhere、デモで上げたコールが実現できると思えた一週間。solidarity!

(おちがひのこ)

## 初の……

代替わりしてからの「初の」なんかいろいろあり、いちいち報道されるからついみてしまう。一昨日は「初の」臨時国会召集。なんとも不思議な髪型になった徳仁は、「国民の信託に応えることを切に希望」して、さつさと夏休み休暇に入った。一度くらい全部見ていけばいいのにね。

今年ももうすぐ八月一五日がやってくる。「初の」「全国戦没者追悼式」が行われるわけだ。明仁や美智子は子どもではあったが戦争体験者である。裕仁のやってきたことも含めてある意味、実感があるだろう。でも徳仁にはもちろん戦争の体験はない。両親から何を伝えられているのだろう。戦争責任のことは？ 徳仁自身はあの戦争をどう考えているのか。そして、何を「おことば」するのだろう。雅子はどう存在するのか？ 徳仁は私と同世代である。その彼がどう考えているのかはとも興味深い。

犠牲者の遺族の前に儀式や言葉をまねることなど簡単だ。でも今までもより一層意味のない、空虚なものになるであろうあの儀式をどのように、そしていつまで続けていくのか？

そして昨日は「初の」死刑執行があった。

(中村なな)

## 嘘はでかいほど信頼される

七月の参議院選挙を前にしてさまざまな世論調査が行われたが、その中のひとつに「言論NPO」と言う団体が行ったものがある（有効回答千人）。それによると、「日本の代表制民主主義の仕組みを信頼しているか」…「信頼している」32.5%、「信頼していない」24.4%。全体では「信頼している」が「していない」を上回ったものの、二〇代と三〇代では逆転した。「信頼している」という回答が最も少なかったのが三〇代で、14.2%。次に少なかったのが二〇代で20.2%。「日本の将来をどのように見ているか」…「楽観的である」30.9%、「悲観的である」47.2%。

注目すべきは、「日本のどの機関を信頼しているか」という質問への回答。「信頼していない」の割合が最も高かったのが「宗教団体・組織」の69.4%で、「政党」67.6%、「国会」60.4%、「メディア」56.6%は、さもありなん。「信頼している」の割合が高かったのが、「自衛隊」77.0%、「警察」71.6%というのは驚きた。そして、もっとも高率で信頼されていたのは、「天皇・皇室」87.1%だ。

(俺たちに明日はない！)

# 状況批評

思想・状況批評

## 皇位継承問題と「女性・女系天皇」論議の現在

桜井大子（反天皇制運動連絡会・女性と天皇制研究会）

七月二七日、政府は皇位継承策を協議する有識者会議を年内に設置する方向で検討に入るといふ。報道によれば、現在の皇位継承順位を前提に、その後の具体的な安定継承策について女性・女系天皇の是非や皇族減少対策を議論するとし、それは前提条件なしに女性・女系天皇に関する議論に踏み込み、今の継承順位を変えらるゝとなれば、皇室制度が揺らぎかねないと判断したといふのだ。要するに男系男子を前提に「安定的皇位継承」を検討することだ。

この少し前の七月二二日の参院選では、この皇位継承問題は争点とならなかった。そのことについて『時事通信』は、「女系天皇を認めるかどうかの議論を避けて通れないことも、各党を及び腰にさせているようだ（2019/7/26）」と、各党が女系・女性天皇論議に及び腰を恐れ、皇位継承問題に触れることに消極的であることを伝えた。同日の『毎日新聞』は、「（女性・女系天皇）について」自民党、公明党は考え方を示していない。これでは議論は深まらない」「皇位継承者が先細りする天皇制の現状をどうするのか、各党は選挙戦を通じて、主権者である国民に考え方を説明すべきだ。／議論を先送りにする時間の余裕はもはやない」と、苛立ちを隠さない。この種の「苛立ち」や「焦り」はメディア各社に滲み出ている。『京都新聞』では「皇位継承のあり方を考えることは、もはや先送りできない。政府や自民の対応は、議論を避けていると言われても仕方ない」とイライラ気味。（2019/07/10）。『読売新聞』でさえ「安定的な皇位継承のためには、与野党が将来を見越して冷静に話し合える土台づくりが不可欠だ」と書いている。（2019/07/27）

実際はどうであったかという、立憲民主党は「女性・女系天皇・女性宮家容認」、国民民主党は「女性天皇・女性宮家容認」「女系天皇は慎重論議」とする立場を公約で明確にした。共産、社民両党は公約には書かなかったが、女性・女系天皇を容認すべきだとの立場を示していた。維新もこの時点で、女性宮家創設に関する議論を始めたとの報道であった。また、徳仁即位前後になされた

世論調査でも、八割近くの人が「女性・女系天皇」に賛成している。言ってみれば安倍が「男系継承の伝統」を尊重する立場を固持し、旧皇族の「皇籍復帰」問題も曖昧にしたままで、「議論を避けている」自民党とそれに追従する公明党がいただけで、与党が動かなかったただけなのだ。

国会を構成する野党の多くが女性天皇容認にまわり、世論も八割近く賛成で、しかもおそらくは天皇と皇族の大半もそれを望んでいると思えるわけだから、二〇一七年六月に成立した「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」同様、条件付きであれ、推進派にとっては不十分な形ではあれ、自民党は渋々でも「女性・女系天皇、女性宮家」容認に向けた改正案を出さざるをえない状況が予想できる。とはいえ、いまここで天皇制の近未来を占うつもりはない。関心がないうわけではないが、いまはそれではないのだ。

### ◆天皇主義フェミニズムの登場か？

三〇年前の「代替わり」の時も「女帝論議」があった。当時は国会レベルではなく、世論もさほど盛り上がりつつあったわけではない。「代替わり」を機に天皇制について考えようという人たちが、今回よりも圧倒的に多くいたが、そのなかで、女性が天皇になれるのはおかしい、女性もなれるように「皇室典範」を改正せよという、フェミニストたちからの主張があったのだ。皇室典範の男女不平等が改められ、女性の社会的地位にも影響を与えようという主張である。それからしばらくは反天皇制運動のなかで女性天皇論議は続いた。私も反対の立場でその議論に参加した。それから約一五年後、小泉政権下の二〇〇四年、二〇〇五年、女性天皇容認のために国会が動いた。現天皇徳仁とその弟秋篠宮以外に若い男子がいなし、これ以上男子出産の見込みもない、という天皇制にとっては大ピンチの事態で、深刻そのものだった。しかし、その年に秋篠宮に男子誕生であっけなく棚上げされ、今にいたる。そしてさらに一五年後の

いま、またしても、女性天皇容認論議だ。今回は、女性天皇・女系天皇・女性宮家の三点盛り。いずれは三点盛りに繋がる話だが、前回は表に出る前に棚上げとなっただけだろう。三点盛りが出た今回は、最初から本格的なのだと見える。実際、平成天皇の三〇年で天皇家の社会的存在は大きくなり、国会議員・メディア・人々の関心も高まっていて、皇族と皇位継承者がいなくなるという危機感はある社会的に大きくなっているとみるべきだろう。こうなることは三〇年前からわかっていたはずなのだけだね。

絶対にあり得ないからこそ、戦略としての「女帝」容認論をブチあげた反天皇制を掲げる女性たちの論は、ここで終止符が打たれる。打たれなくてはなるまい。伝統主義を貫くごく一部の右翼を除けば、いまや女性・女系天皇の容認こそが天皇制を時代に即した形で継続させる唯一の策となりつつあるのだ。また、天皇主義フェミニストとも呼べる人たちの主張も上がり始めている。

最近新聞でも取りあげられた「ゴウツツジの会」というグループだ。二〇一七年に発足し、「憲法違反・性差別の象徴【秋篠宮立皇嗣】に反対の声をあげよう！意見広告」に募金呼びかけ、その年の七月に複数の地方紙に掲載。現在会員は三〇〇人という。その主張は、「私たちは、今上陛下、皇太子殿下直系の女性天皇を支持します」というもの。ブログには次のような主張もある。

「女性天皇を支持する国民の会——『性別を問わない直系長子継承』こそ安定的皇室存続のための唯一の道。『このままでは皇室が『国民の象徴』ではなく『性差別の象徴』になってしまいます。民主主義国の一員として看過できません。』『立憲民主主義のもと、国民を欺くことがない象徴天皇の存続を願う私たちは今、渾身の力でこの危険な愚行（秋篠宮の『立皇嗣礼』）を止めなければなりません』

ただの右翼フェミニストだが、ちょっとリベラル天皇制支持派をも彷彿させられないか？

#### ◆世襲の問題から始めるという戦略

天皇制と民主主義が共存できると考える天皇制民主主義に加え、ただの右翼と言ってもいいが天皇主義フェミニズムとも言えそうな人々の登場は脅威である。女性天皇の実現で女性の社会的地位向上を訴えた、あるいは、天皇制

廃止といった大変革は困難なので、少しずつ皇室内民主化を図るべきでは、といった論理。かつて次善策としての女性天皇推進を語ったフェミニストたちの論理が、ゴウツツジの会というあだ花を咲かせたのか。それとも、まったく別の文脈からこの天皇主義者たちは出てきたのか。いずれにしろ先のフェミニストたちと似て非なることは間違いないが、女性天皇に反対してきた私も、なんともこの状況には胸が痛くなる。反天皇制の運動と皇位継承問題を、フェミニストの視点でどのように整理し、新たな論理展開をするのか。ともに考えていきたいと思う。

そして最後に一つ。女系天皇まで認めたとしても天皇制であるかぎり世襲制は残る。世襲制を支える女性天皇が象徴となって喜ぶのは誰か。多くの女たちもその中に入るかもしれない。しかし、「産む」ことの強制性は増しても和らぐことはないはずだ。また、皇位継承問題で語られがちな「傍系」か「直系」か、「非嫡出子」か「養子」か「嫡出子」か等々、ウンザリする差別的議論もこの世襲制が根本にある。最終的にイヤな思いをするのも女・子どもなのだ。

いろんな問題があるのは承知の上で、世襲の天皇制をこの国の制度として残すのかという問題から考える視点は、今の状況ではけっこついいけると思っている。女性の心身を支配する世襲制を否定するところから考えれば、天皇制が問題であることは明確だし、世襲制で成立する天皇が自分たちを象徴するものとしてふさわしいのか、自分たちの意思とは無関係に憲法で定めていることは妥当なのか、さらには象徴は本来に必要なのかと、議論は拡がっていく余地は大きい。もちろんそこから、植民地政策や侵略戦争の責任問題、身分制度をはじめとする差別の問題、現憲法の三原則である「主権在民」「基本的人権の尊重」「平和主義」をないがしろにしてしまう天皇制の継続問題にも繋がっている。

天皇制を不要なもの、あつてはならないもの、といった認識がこの社会のものにならないかぎり天皇制はなくせない。道は遠い。でも、そこに向かうしかないし、いろいろ試行錯誤していくしかないと思う。しかし一方で、自分たちの意思で廃止させたい天皇制だが、天皇制の自己矛盾で自滅するのも悪くはないと思う。男系男子という伝統を抱きしめて廃止になるならば、みんな幸せなのでは、と。

廃止のための切り口は多数ある。とにかく今は声をあげよう。

# なつたーネットワーク

## 茨城国体反対デモへの招待

### 加藤匡通（戦時下の現在を考える講座）

天皇代替わりは世間をほぼ祝意一色にして一段落し、ナルヒトとマサコは新天皇・皇后として認められたようだ。圧倒的な賛意の中で、しかしそれでも天皇制反対の声は各地で上がり、様々な取り組みが続いている。

公的行為三大行事は今年から新たに国民文化祭を加えて四大行事となり、六月に愛知で植樹祭が、九月初めに秋田で豊かな海づくり大会が、九月から十一月にかけて新潟で国民文化祭が、九月末から一〇月にかけて茨城で国民体育大会が行われる。いずれも「新天皇初の」と冠がつくだろう。三大行事に対してはこれまで各地で反対運動が取り組まれてきていたが、近年は寂しい状態になっている。中でも国体は、六〇年代の自治体労組を中心とした国体民主化運動から反対運動が続いてきたが今世紀に入って途切れ、一三年の東京を最後に大きな取り組みの報告は聞いていない（私たちが知らない、つながっていないだけで微細な取り組みはいくつもあるだろう）。

茨城国体が一九年にあると知ったのは何年前だったろうか。私たち戦時下の現在を考える講座で取り組みねばと話していたらその年に代替わりと決まり、目の前の課題をこなしているうちに直前になってしまった。昨年からは集会など国体への

取り組みを行っているが、行政交渉の力量もなく、地域から浮いた単身者ばかりなので地域での国体の浸透や推進の実態もわからぬままに過去の資料を読む学習会が中心になっている。

前回の茨城国体は七四年だった。前年には現職の土浦市長が国体にも使用する国民宿舎建設に関わる収賄で逮捕され有罪が確定したものの、一年の市長選で再選している。これなど国体と言うよりは、選挙の度に当たり前のように札束が飛び交い、『茨城県戦後汚職年表』なんて本が出るくらいに汚職に馴染み（？）ある茨城らしいエピソード、かもしれない。大会期間中には馬術競技選手が県内で交通死亡事故を起こし、所属する東京の馬術選手団は出場を中止している。事故を起こした竹田恒和選手は東京オリンピック招致で疑惑をかけられた前JOC会長その人である。事故は示談になったと言われているが確認できていない。金と地位、あるいは身分（明治天皇の曾孫である）で解決したと勘繰られても仕方あるまい。

七四年、開催期間中に茨大で「黒ヘル、駐車場を占拠」があったと新聞に小さな記事が残っている。全国組織まで作られた国体民主化運動もいつのまにか消えてしまった。前回国体で茨城県内どのような民主化運動があったのか、今一つ確認

できていない。今回の国体では自治労も自治労連も県教組も取り組みはしないと明言している。今動いているのは反天皇制運動としての国体反対運動だけだ。八月の学習会ではそんな報告をする。かつてのように子どもを大量動員したマスゲームはなくなったし、自治体職員八割が大会に駆り出され行政窓口が機能しなくなるようなこともなくなった。だが、花いっぱい運動のような道徳臭の強い運動は地域を巻き込んで続けられているし、学校でも子どもたちは選手や観客として動員されている。「おこことば」も天皇警備もなくなるはずもない。銃剣道は隔年となり、今年はeスポーツが加えられ、三年からは国民スポーツ大会へと名が変わり、と国体は改革の真最中らしい。それでも、天皇制を支持する「国民」を作り出すための儀式の一つであり、私たちを動員することを通じて「国民」へと統合しようとする天皇行事としての本質に変わりはない。私たちが求めるのは国体の民主化や改革ではなく廃止であり、天皇制そのものの廃止である。

九月二八日の開会式当日、会場の笠松運動公園に向けてのデモを予定している。最寄駅まで三・五キロ、バスもなく延々雑木林を歩く道なのでデモコースの設定で悩んでいるが、とにかくやるのだ！ 新天皇初の国体に、共に茨城で反天皇制の声をぶつけよう！ 行動の詳細はしばしお待ちを。

そして、各地でさらなる天皇制廃止の闘いを！

みたび

# 太田昌国の夢は夜ひらく 110



## 「政治」と「選挙」をめぐる

参議院議員選挙の結果を見ながら、選挙の前に存在していた、そして後にも続く「政治」のことを思った。選挙とは、今やあたかも、「一日だけの主権者」が「代議員」を選んでしまうだけの行事と化している。「選ばれる」者は、絶対得票率から言えば全主権者の一六・二〇％程度を獲得できただけに「全権」を委託されたと居直り、「選ぶ」側は必要な時にはリコール権行使しなければ選挙はその意義を半減させてしまうことにも無自覚に、すべてを議会任せにしてしまう。その繰り返しの果てに、「議会制民主主義」はひどく形骸化した。世界じゅうでそうだが、とりわけ現在の日本は、惨！の極致だ。

今回は、選挙だけに拘泥せずに、「政治」そのもののことを考えてみる。去る七月二七日は、朝鮮戦争休戦協定締結（一九五三年）から六六年目を迎えた記念日だった。休戦協定締結から六六年も経ていながら、それを平和協定に進展させる「政治」を行ない得なかった者は誰か。共和国と言えば、金日成、金正日、金正恩の三人だ。韓国と言えば、李承晩以降の大統領は一二人を数える。この戦争の当事国である米国も、休戦協定以後の交渉には必要欠くべからざる存在だが、六六年間には一二人の大統領が在

任した。この「政治家」たちはいずれも、この六六年間の「政治的無為無策」への責任を、軽重はあっても何らかの形で負っている。金正恩、文在寅、トランプは在任中だから、行く末を見なければならないうとしても、朝鮮半島の住民は、こんな「政治」への怒りを心の底に秘めているに違いない。あるいはこんな「政治」を変えることができない主権者であるはずの自己の無力を託つか。

朝鮮国には「選挙」の自由もなければ「リコール」の権利もない。そこで行なわれてきた「政治」の責任は、第一義的に三代の独裁者に帰せられよう。韓国の場合は、軍政時代もあり、六六年間を一樣に論じるわけにもいかない。日本も、休戦協定問題の直接の当事国ではないが、朝鮮に対する植民地支配の加害国として、広く朝鮮半島の平和のためにどれほど積極的な政策を行なってきたかという観点から、六六年間の「政治」のありようが厳しく問われざるを得ない。この一二年の動きを見ても、和平へと向かう南北の歩みを歓迎せずに、むしろ妨害者としてふるまってきた過去が審問に付されよう。

さて、同じ年一九五三年の前日、七月二六日は、キューバの革命運動開始記念日だった。フィデル・カストロらが、バチスタ独裁政府軍のモンカダ兵

営を攻撃した日である。その後のキューバ革命運動の主体が「七・二六運動」と名乗るのは、この日付を記念日としたからである。それから六年後の一九五九年、カストロたちは独裁政権を打倒して、革命は勝利した。したがって、今年は革命から六〇周年の年に当たる。

武装闘争で勝利した革命家たちはどんな「政治」を行なってきたらうか。革命初期、社会的公正さを確保する政策路線の下で、教育・医療・福祉などの分野で第三世界の国としては画期的な達成を遂げ、「先進国並み」との評価を得たことは事実だが、その後はどうか。下からの民主主義・言論と表現の自由・生活必需品の保障・軍隊（革命軍）の文民統制・選挙とリコール権などの観点で見た場合はどうか。旧ソ連に象徴された二〇世紀型社会主義の「限界」がそこでも露わになっていることは明らかだ。

私は権力者には何の共感も持たないが、朝鮮・韓国・米国・キューバの民衆の心の動きと動静は気になる。日本の私たちと同じように、「政治」のあまりのひどさに怒り、絶望しているだろうか。ヨリましな「政治」に、小さくはあれ幸福感を抱いているだろうか。いずれにせよ、「政治」の在り方は、所与の社会に生きる人びとの生死をこれほどまでに牛耳るものであるのに、為政者が冷酷なブルジョア代表であれ、初心は理想と夢に燃えていた革命家であれ、現状ではどの社会にあってもろくな「政治」もろくな「選挙」も行われていないことには疑いようもない。人類は、「政治」や「選挙」の賢いやり方をいまだに弁えてはいない時代を生きている。

(8月2日記)

マスコミ  
ばかりの  
天皇制 37

「ナルヒト・マサコ」賛美と「アキシノ・キコ」ブリーイングの手のひら返し

## 〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その3



七月一日、「徹底検証 ナルヒト天皇制」(主催・終わりにしよう天皇制! 『代替わり』 反対ネットワーク)の集会。私は問題提起者の一人として「代替わり」奉祝報道批判のテーマで発言。

NHKが「皇室の祖先は天照大神」と平然と報道していることに象徴される「天皇を中心とする神の国日本」という、大日本帝国憲法下（天皇八神聖ニシテ侵スヘカラス）の神話のイデオロギーと「万世一系」の天皇の皇室神道（退位・即位）儀礼が公然と露呈されている状況。この政府・皇室・マスコミが一体化して演出してつくり出している、不気味なムード（正面からの批判の声は、存在していないかのよう押しやられている）。

この状況を、私たちは、かつての天皇制ファシズム（神権国家・国家神道）のまるごとの復活と考えるべきではない。「神話」には「日本の伝統・文化」というソフトなボールが被せられており、退位していく天皇も即位する新天皇も「現人神」ではなく「尊敬されるべき、最高に偉い、素晴らしき人間」という人柄の賛美の衣が幾重にもかけられているのだから。こうした象徴（人間）天皇制の政治マジック（イデオロギー操作）が全面展開されるのであり、私たちは、この〈象徴Ⅱ人間天皇教〉のイデオロギーを内側から食い破っていく作業を日常的ににつみあげていかなければならないのだから。

こういう趣旨の発言をしながら、この集会の場ではふれる時間はなかったが、「令和の御代の末永き弥栄をお祈り申し上げます」という「新天皇即位の賀詞」決議問題。この共産党まで賛成した国会での「決議」に

よる「天皇陛下万歳」（翼賛）国会の成立という恐るべき状況という問題もあった。

「天皇代替わり」の国家の政治こそがこうした状況をつくり出してしまっているのだ。原則を決定的に踏み外した転向は、とめどない転落への入口である。かくのごとき状況全体を見据えた、押し戻していく運動的努力が私たちに求められているのだ。天皇（制）という政治的踏み絵の力は十分に生き続けている。

さて、今、マスコミを支配しているのは（甞ったマサコ）を媒介にしたナルヒト天皇賛美である。代表的なレポートを一つ紹介する。「紀子さま」逆風がもつたの幸いで……『雅子皇后』復権をもたらした5つの僥倖（『週刊新潮』7/25号）は、こう書き出されている。

『「ご公務を休まれて批判を受けていた頃とは、たまたまいかがるで異なります」／古参の宮内庁職員を感嘆せしめた新皇后は現在、まさしく別人のように凛冽とご公務に臨まれており、／「正直のところ、ここまで好調が続くとは、我々も予想していませんでした」／そう話すのは宮内庁担当記者である。／『5月下旬に来日したトランプ大統領夫妻の歓迎行事ではフル稼働され、続いて6月1日からは「全国植樹祭」ご出席のため1泊2日の日程で愛知県へ行幸啓されました。これは上皇夫妻から受け継いだ大切な行事で、四大行幸啓の一つでもある。晩餐会などのお疲れが残っていれば、あるいはご欠席か、という一抹の不安があったのですが、それも杞憂に終わり、皇后さまは「こやかにお務めを果たされていました」その後も好調のまま……』。

この後この好調の理由を具体的に論じている。元  
外交官の面目躍如の「外交」がマスコミで大絶賛、このの  
「代替わり」ヨイシヨ記事の大洪水と人々の歓迎かりが、  
彼女を「自信回復」させたというのが第一。「手のひら  
を返したような」マスコミの論調変化が、第一の理由と  
その「手のひら返し」の代表メディアがそう書いている  
のだから笑うしかない。第二が「眞子婚約スキャンダル」  
などでの、浩宮・雅子のネガティブイメージに対比して、  
持ち上げられていた秋篠宮家の逆風に、心理的に救わ  
れたというお話。皇后になつちまえば、マスコミは自  
動的にそちらの方についていくというわけだ。

こうした流れは、娘「愛子」賛美へと必然的に連動する。「支持率80%の脅威!『愛子天皇』を潰したい」「安倍官邸」の皇室戦略!『週刊新潮』8/8号)は男系主義にこだわる安倍首相は高まる愛子人気がつくりだす「女性天皇」容認論の支持の拡大を押さえ込むため、「国論二分という愛子さまvs悠仁さま論争を封印」にこれつとめているのだという。ここでも秋篠宮の悠仁を、つれての外交準備のワガママぶりが、新天皇家の人気ぶりと「コントラスト」に語られている。この流れで、きわめつきは「10人の宮務官が7人に 秋篠宮家職員が辞めている」(『週刊文春』8/8)である。ここでは紀子のパワハラウーマンぶりがリアルにレポートされている。

ここにあるのは、「皇位の安定的継承」のための明仁「生前退位」から「女性天皇」の実現へとという政治プロセスに、人々の人間的関心を集中させるイメージ操作であるにすぎない。

（象徴（人間）天皇教）の「皇位の継承」という土俵  
 自体を蹴つ飛ばす言葉と運動を！

# 7月1日〜7月31日

7月1日〜7月31日

7月1日

徳仁、雅子◆トルコのエルドアン大統領夫妻を皇居・宮殿に招き、会見。

秋篠宮、紀子◆ワルシャワのポフシン植物園で、サクラを植樹。

「秋の園遊会」◆宮内庁が、天皇、皇后「主催」の秋の園遊会を当年は開催しないと発表。

7月2日

徳仁◆サウジアラビアのムハンマド皇太子を元赤坂の赤坂御所に招いて、懇談。

秋篠宮、紀子◆ワルシャワの日本大使公邸で国交樹立100周年記念レセプションに出席。

7月3日

秋篠宮、紀子◆フィンランドにある「夏の官邸」で、ニースト大統領夫妻と懇談。代替わり◆宮内庁が、天皇の代替わりに伴う儀式や祭祀の細部を詰める「第7回大礼委員会」を開き、「大賞祭」の主会場「大賞宮」の地鎮祭を建設場所の皇居・東御苑で、26日に行うことを決める。

女性・女系天皇◆安倍晋三首相が日本記者クラブでの討論会で、安定的な皇位継承策を巡り、女性天皇や女系天皇を容認するか否かについて、クラブ側の質問者から挙手を求められ、いずれも賛否を明らかにせず。

7月4日

秋篠宮、紀子◆ヘルシンキの日本大使公邸で、両国の外交関係樹立100周年の記念レセプションに出席。

7月5日

美智子◆東京・渋谷のBunkamuraオーチャードホールを訪れ、チャリティーコンサート「生きる2019」を鑑賞。

秋篠宮、紀子◆フィンランドのエスポーで、「ネウボラ」を視察し、利用者と交流。

7月6日

秋篠宮、紀子◆民間機で成田空港に帰国。

7月9日

眞子◆成田発の民間機で南米のペルー、ボリビア両国の「公式訪問」に出発。

7月10日

眞子◆献血運動推進全国大会に出席するため、羽田発の民間機で石川県入り。

7月11日

眞子◆金沢市の石川県立音楽堂で第55回献血運動推進全国大会に出席。

7月12日

眞子◆ペルーの首都リマで、日本人移住120周年記念式典に出席しあいさつ。

7月13日

眞子◆ペルーを公式訪問中の眞子がリマ市内の大統領府を訪れ、ビスカラ大統領を表敬訪問。

7月14日

眞子◆ペルーで、日系人が中心となって運営している老人ホームや、織物博物館を視察。

7月14日

眞子◆世界遺産のマチュピチュ遺跡を視察。

7月15日

秋篠宮、紀子◆第29回国際地図学会議の開会式に出席。

7月16日

眞子◆サクサイワマン遺跡などを見て回り、ボリビアに移動。

大嘗祭◆徳島県美馬市木屋平で、一月にある「大嘗祭」で献上される麻織物「鹿服」の材料となる大麻が収穫される。

7月16日

明仁、美智子◆明仁の皇太子時代の側近トップ故鈴木菊男・元東宮大夫（1906〜97年）が、皇太子妃選考の経緯をまとめたメモが見つかった。

明仁◆11日に一時強い脳貧血の症状が出たため、大事を取って12日午後に予定していた宮内庁病院での定期健康診断を後に延期。

7月17日

眞子◆ボリビアに到着し、主要都市ラパスの大統領府を訪れ、モラレス大統領を表敬訪問。

7月17日

秋篠宮、紀子◆第16回海フェスタの式典出席などのため、静岡市を訪問。

7月18日

眞子◆ボリビアの首都ラパス市内で日本人移住資料館などを視察。

7月18日

秋篠宮、紀子◆静岡市内の複合施設「グランシップ」で、第16回海フェスタの記念式典に出席。

7月19日

眞子◆ボリビア東部のオキナワ移住地を訪れ、風土病で死亡した移住者らの慰霊碑に献花。

7月19日

眞子◆ボリビア東部の日本人の移住地サンフアンを訪問。

7月20日

紀子◆横浜市にある横浜能楽堂を訪れ、新天皇即位を祝した能「大典」を鑑賞。

7月20日

眞子◆ボリビア東部のオキナワ移住地を訪れ、風土病で死亡した移住者らの慰霊碑に献花。

7月22日

徳仁◆2020年東京五輪・パラリンピック両大会の名譽総裁に就任する。就任期間は、五輪開幕の1年前の当月24日からパラリンピック閉幕の翌年9月6日。

7月24日

秋篠宮、紀子◆東京都渋谷区立松濤美術館を訪れ、「大倉陶園」特別展「華めく洋食器」を鑑賞。

7月24日

眞子◆羽田空港着の民間機で帰国。

7月25日

明仁、美智子◆那須御用邸に入る。

7月25日

佳子◆静岡県御殿場市の馬術・スポーツセンターを訪れ、第69回全日本高校馬術競技大会の開会式に出席しあいさつ。

7月25日

明仁、美智子◆栃木県那須町の那須御用邸内の休憩所「嚶鳴亭」の周辺を散策。

7月26日

秋篠宮、紀子◆全国高校総体の総合開会式出席などのため、鹿児島県を訪問。

7月26日

悠仁事件◆お茶の水女子大付属中（東京都文京区）で、悠仁の机に刃物が置かれた事件で、東京地検が、建造物侵入や銃刀法違反、器物損壊の罪で男性を起訴。

7月26日

**大嘗宮**◆11月に催される「大嘗祭」の舞台となる大嘗宮の地鎮祭が、建設場所の皇居・東御苑で行われる。

**7月27日**

**秋篠宮・紀子**◆鹿児島市の「鹿児島アリーナ」で、全国高校総体の開会式に出席。全国高校総合文化祭の開会式に出席するため、九州新幹線で佐賀県へ移動。

**皇位継承**◆政府が安定的な皇位継承策を協議する有識者会議を年内に設置する方向で検討に入った。

**7月28日**

**秋篠宮・紀子**◆佐賀市を訪れ、全国高校総合文化祭（総文祭）の特別支援学校部門の活動発表を見て回る。全国高校総体が開かれている鹿児島県に九州新幹線で

移動し、バスケットボールの試合を観戦。

**7月29日**

**徳仁、雅子**◆「地球科学・リモートセンシング国際シンポジウム2019」開会式に出席。

**明仁、美智子**◆那須御用邸から帰京。

**秋篠宮・紀子**◆鹿児島県霧島市の「牧園アリーナ」で、全国高校総体のフェンシ

## 美智子の「黙示録」

**議會を浸蝕する差別主義・レイシズムを許すな！7・14集会**

.....

今から一〇年前、フィリピン人一家に対し在特会らはその追放を叫び、激しく攻撃した。直後、京都朝鮮学校襲撃事件も起こしている。これをきっかけに差別・排外主義団体は勢いづき街頭活動を活発化させつつヘイトスピーチを拡散させた。二〇一六年にヘイトスピーチ解消法が成立すると、在特会初代会長桜井誠は日本第一党なるものを立上げ、都知事選に出馬した。議会にも触手を伸ばしたのである。

今集会は日本第一党のような露骨なヘイト団体のみならず、現に議員である者がいかに議會を腐らせてしまっているのか、その背景や現状に迫る。

まず、研究者の立場から明戸隆浩さんにお話をいただいた。明戸さんは石原都政

時代に遡り、政治家によるヘイト事例を取り上げつつ日本第一党等の排外主義政党の問題に言及した。その根幹にあるのは旧植民地時代に培われた優越感であり、連綿と続く無意識の差別感情であろう。しかし、露骨な差別言動にもかかわらず差別ではないとするのは「歴史否定を一般化した概念で、既に生じた差別による加害を否定したり、過小評価したり、正當化」するからであると語る。

次に、被害者の視点で取材をしてきた神奈川新聞社の石橋字さんから、ヘイトスピーチ根絶のため川崎市が提案している「(仮称)川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例」の説明があった。この案の前提には激烈なヘイトデモ(私も力ウンターに加わったがとしかくひどかつた)の歴史がある。この条例案の画期的な側面はヘイトスピーチ解消法が理念法であるのに対し五〇万円までの罰則規定を設けたこと、「ヘイトスピーチにつながらなくていく土壌に、直接対処する」ものであることだ。ただ、ネット上のヘイトについては不十分とも語った。

いずれにしろ、議會を浸蝕する差別主義・レイシズムとの闘いはこれからである。

いずれにしろ、議會を浸蝕する差別主義・レイシズムとの闘いはこれからである。

## 徹底検証！ナルヒト天皇制

.....

アキヒトの生前退位発言から続いた皇室大フィーバー報道も、退位、即位儀式を経て、十月に行われる大嘗祭までしばらく休息か、メディアの加熱報道は現在吉本興業の話題で持ち切りだ。

ナルヒトが新天皇になった直後は、皇室祭祀や儀式に続き、トランプ米大統領との会談のような「外交」や晩餐会の模様を、新皇后マサコも同時に持ち上げる新天皇夫婦賛美報道が続いた。

さらに国会や地方議会では「即位を祝う賀詞」があげられるなど秋にむけ翼賛体制が進められている。

新たな天皇像とはどのようなものなのか。アチラ側が作るうとしていているこれらの天皇制のあり方を研究分析し、これを打ち破っていく運動の体制をどのように作っていくのかを共に模索するために

ングの試合を観戦。午後、帰京。

**7月31日**

**秋篠宮・紀子、悠仁**◆北海道函館市と沖縄県から訪れた小中学生60人の「豆記者」を、東京・赤坂御用地にある赤坂東邸に招き、懇談。悠仁の同席を検討し、秋篠宮・紀子が了承したと報道。

おわてんね」と主催で七月一五日に、文京区民センターで表題の集会を行った。最初に井上森によるナルヒトの半生を振り返るスライドトーク。膨大な映像の量は、ミッチーブームから始まる皇室情報報をTV媒体を通して「国民」にいか浸透させていったかを物語っている。それを受けるような形で、天野恵一は『代替わり』奉祝ファシズム報道の分析を行い、続いて、桜井大子は、「皇位継承問題」に焦点をあて批判した。

最後に小倉利丸さんはナルヒトと水(グロバリズムの観点から)をテーマに「象徴天皇の政治的な関与」の傾斜、政治利用の可能性を示唆された。

今回、「ナルヒト時代の日米同盟」も重要な視点として柱を立てていたが、発題者の都合で次回のお楽しみとなった。参加者一三〇人。(桃色鰐)

## 南京大虐殺・靖国に抗議した香港人弾圧を許すな！

七月一七日、12・12 靖国神社抗議見せ

しめ弾圧を許さない会による、「南京大虐殺・靖国に抗議した香港人弾圧を許すな！7・17集会」が開かれた（文京区民センター、五〇人）。この日行われた第六回公判で弁護側証人尋問が行われ、裁判が大きな山場を迎えたことを受けたものだ。昨年二月、南京大虐殺・靖国神社に抗議する行動を行ない、あるいはそれを撮影して逮捕・起訴された郭紹傑（グオ・シウギ）さんと嚴敏華（イン・マンワ）さんは、度重なる保釈申請も却下され、不当な勾留がすでに八ヶ月を超えている。集会は、都留文科大名誉教授の笠原十九司さんの講演から始まった。

笠原さんは、学界において南京大虐殺の事実と死者の数などもほぼ確定してきているにもかかわらず、安倍晋三が中心になって取り組んできた教科書攻撃の「成（nizhinet）（北野賞）」

果」として、中学校の歴史教科書から「日本軍慰安婦」の記述が消え、「南京大虐殺」の死者についても具体的な数値が消されていることなど、歴史修正主義の安倍政権にとつて、南京と靖国が重要な意味を持つてきたことを明らかにした。二人の香港人に対する常軌を逸した攻撃は、その政治姿勢の反映でもあるはずだ。続いて、当日の証人尋問に立った田中宏さんと和仁廉夫さんからの発言、長谷川弁護士による法廷報告もなされた。

今後の裁判の見通しとしては、次の第七回公判（八月二十八日、一三時半）において論告求刑、最終弁論。一〇月一〇日午後、判決公判となる予定。救援会では秋にも集会を予定している。引き続き注目を！（<http://miseseshine>）

おことわりリンクとその構成団体でもある反五輪の会や大学関係者が集まり、それぞれできる部分を担いながら、それでも大変な準備を重ねた結果の八日間だった。二〇日…新国立競技場と湾岸フィードワーク、二一日…「祝賀資本主義」等の著者ジュールズ・ボイコフを迎え

7・20—7・27開催 一年前!? 反五輪国際イベント

二〇二〇年東京オリンピック開催から一年前の二四日をはさむ八日間、7・20—7・27を文字通り連続行動として取り組まれた反五輪国際イベント。反天連も総出で関わってきたおことわりリンクも主催団体の一つだ。というわけで、あまりしつかり関わられたわけではないが簡単に報告。

「祝賀資本主義とオリンピック」、二二日…福島フィールドワーク、同日夜…平昌・東京・パリ・LAナイトピクニック、二三日…記者会見とメディアワークショップ、二四日…オリンピック大炎上新宿デモ、二五日…研究者・ジャーナリスト研究会、二六日…討論集会、二七日…パネルディスカッション、とハードな日々。私は二日と三日を除いて、参加。疲れたけど面白かった。内容報告は割愛。反天連界限が力を注いだのは二四日のデモ。参加者二〇名でアルタ前もデモも賑やかな行動となった。警察も慣れない外国人対応にどうして良かったかわからないという風。面白かったが、来年はそうもいかないよね。連日「ジョンチャン・パリ、リオ、ロス、ロンドン、等々からの海外参加者も含め、たくさんの参加者で賑わっ

## 【学習会報告】

### 島蘭進『神聖天皇のゆくえ——近代日本社会の基軸』

（筑摩書房、二〇一九年）

島蘭は、岩波新書「国家神道と日本人」、春秋社「明治大帝の誕生」と本書を、自身の近代天皇制に関する三部作と位置づける。ほか、片山との対談も含め、いずれも近代天皇制の成立をめぐる通史として読む限りにおいては叙述として共通しており、読みやすい見取り図にはなっている。

しかし島蘭は、国学や「国体論」の中

で醸成され「完成」し、かつて支配イデオロギーとして猛威をふるった「神聖天皇」の思想をひも解いてみせるが、それが「象徴天皇」としてなおある現在の問題点については、あまり分析を加えようとしなない。一九四五年以降に、戦後改革により国家神道が否定され「現人神」も否定されながら、皇室神道や天皇の祭祀が明には否定されず残存させられたこと

により、むしろそれらが天皇制の根幹となったことについても、問題の所在を示しながら論述を避ける。これは、「天皇は権威であって権力ではない」として天皇制の歴史的責任を免罪させる戦後歴史学のドグマが、島蘭に貫かれているからだろう。しかし、それが政治家や官僚などから不可触の権力を確保しようとする「神聖天皇」の本質ではないのか。

天皇制が「仁政」と「慈恵」の「福祉国家」の基軸であるかのように天皇や皇族がふるまい、それを受容する社会やメディアの状況など、指摘されておりさらに踏み込まねばならない問題は多い。それにもかかわらず島蘭は、天皇や皇族の「公私三元論」の構造に触れず、明仁や秋篠文仁の発言には肯定的だ。議論では、政治史分析の枠組みを欠いていることへの批判が多く出た。

次回は八月二〇日、伊藤智永『平成の天皇』論（講談社新書）を読む。

（蝙蝠）

た(反天ジャーナルも参照してちょう)。

(太子)

## 「天日」

7月9日(火) ●原発被ばく労災あらかぶ  
さん裁判第12回口頭弁論

7月12日(金) ●香港人靖国抗議見せしめ  
弾圧第5回公判

7月14日(日) ●議会を浸蝕する差別主義・  
レイシズムを許すな！(集会報告参照)

7月15日(月・休) ●徹底検証！ナルヒ  
ト天皇制(集会報告参照)

7月17日(木) ●香港人靖国抗議見せしめ  
弾圧第6回公判

●南京大虐殺・靖国に抗議した香港人弾  
圧を許すな集会(集会報告参照)

7月20日(日) ●27日(土) ●反オリンピッ  
ク国際ウィーク(集会報告参照)

7月27日(土) ●パネルディスカッション  
[Make Olympic History]

## 集会情報 INFORMATION

3月1日(金) ●開催中●朝鮮人「慰安婦」  
の声をきく

13時〜18時(月・火・休日休館) / W  
AM 女たちの戦争と平和資料館(地

下鉄早稲田駅) / 主催：同館

8月10日(土) ●平和の灯を！ヤスクニの  
闇へ 第14回キャンドル行動

13時開場 / 在日本韓国YMCA (JR水  
道橋駅ほか) / 高橋哲哉、竹内康人、渡

辺美奈、林幸成 / 主催：キャンドル行動  
実行委員会(03-3355-2841)

8月11日(日) ●安倍政権による、マス

コミを意識的に利用した「天皇教」の  
布教活動を許すな！

14時開場 / ビーブルズ・プラン研究所  
(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 天野恵一、

井上森、松井隆志、白川真澄、米沢薫  
/ 主催：同研究所(03-6424-5748)

●茨城国体今昔物語  
14時〜 / 竹園交流センター大会議室(T

Xつくば駅よりバス) / 主催：戦時下  
の現在を考える講座(090-841-1457

加藤)  
8月14日(水) ●日本軍「慰安婦」メモリ  
アル・デー

13時30分開場 / 日比谷図書館コン  
ベンションホール(地下鉄内幸町駅ほ

か) / 梁澄子ほか / 主催：戦時性暴力問  
題連絡協議会、日本軍「慰安婦」問題解

決全国行動(090-6020-5677)  
8月15日(木) ●「戦争」と「トラウマ」  
もつこの戦争

9時30分開場 / ルーテル市ヶ谷センター  
(JR市ヶ谷駅ほか) / 中村江里 / 主催：

8・15東京集会実行委員会  
●「天皇に平和を語る 資格なし」国家に

よる「慰霊・追悼」反対行動  
13時開場 / 在日本韓国YMCA (JR水

道橋駅ほか) / 松井隆志 / 主催：終わり  
にしよう天皇制！「代替わり」反対ネッ

トワーク(090-3438-0263)  
8月20日(火) ●いつのまにか監視されて

いる私たちの日常  
18時30分〜 / 千駄ヶ谷区民会館2F (J

R 御原宿駅ほか) / 小笠原みどり / 主  
催：盗聴法に反対する市民連絡会(090-

2669-4219 久保)

8月24日(土) ●わだつみ会8・15集会「天  
皇教」と私たち

13時30分開場 / 中央大学駿河台記念館  
320号(JR御茶ノ水駅ほか) / 横田

耕一 / 主催：日本戦没学生記念会(わだ  
つみ会)事務局(080-4706-8071)

8月27日(火) ●アキヒト退位・ナルヒト  
即位問題を考える練馬の会 第5回学習

会「皇室におけるジェンダー」  
18時15分開場 / 練馬区立厚生文化会館地

下大会議室(西武池袋線ほか練馬駅) /  
千田有紀 / 主催：同会(090-5208-5803

池田)  
8月28日(水) ●香港人靖国抗議見せしめ  
弾圧第7回公判

13時30分〜(傍聴抽選締め切り13時)  
/ 東京地方裁判所429号法廷(地下

鉄霞ヶ関駅ほか)  
●芸術と憲法を考える連続講座「花はあば」

18時開場 / 東京藝術大学音楽学部5-  
109教室(JRほか上野駅) / 浜田

桂子、田島征三 / 東京藝術大学音楽学  
部楽理科(kempougeida@gmail.com)

8月31日(土) ●天皇制に終止符を！「代  
替わり」で考える「天皇制」の戦争責任

13時30分開場 / 日本キリスト教団紅葉坂  
教会(JRほか桜木町駅) / 渡辺美奈 /

共催：日本基督教団神奈川教区社会委員  
会ヤスクニ・天皇制問題小委員会、「日

の丸・君が代」の法制化と強制に反対す  
る神奈川の会 ほか(090-3909-9665)

9月1日(日) ●関東大震災朝鮮人犠牲者  
追悼式典

11時〜 / 横網町講演(JR両国駅ほか)  
9月7日(土) ●関東大震災から96年 韓

国・朝鮮人犠牲者追悼式  
15時〜 / 荒川河川敷(京成八広駅ほか)

/ 主催：一般社団法人ほうせんか、ほか  
(090-6563-1923)

9月8日(日) ●関東大震災96周年 中国  
人受難者追悼式

11時〜 / 東大島文化センター(地下鉄  
大島駅) / 主催：関東大震災中国人虐

殺を考える集い実行委員会(080-1142-  
2515)

9月14日(土) ●「原発テロ」対策とは、  
本当は、どういう問題なのか？

18時開場 / スペースたんぽぽ(JR水道  
橋駅ほか) / 山崎久隆、宮崎俊郎 / 主

催：福島原発事故緊急会議(090-1705-  
1207 国電)

9月21日(土) ●ここが問題！即位礼・大  
嘗祭

14時〜 / コミュニティカフェPao(浜松  
市中区野口町) / 新孝一 / 主催：代替り

問題浜松講座(053-423-4810)  
9月24日(火) ●原発被ばく労災あらかぶ

さん裁判第13回口頭弁論  
13時30分〜 / 東京地方裁判所103号

法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)  
9月25日(水) ●即位・大嘗祭違憲訴訟第

4回口頭弁論  
14時30分〜 / 東京地方裁判所103号

法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)  
9月28日(土) ●茨城国体反対デモ 天皇

は茨城に来るな！天皇制は今すぐ廃止し  
ろ！(仮) \*詳細次号